

ジェンダーと男女共同参画社会

2005年9月9日 袖井孝子

1 ジェンダーという言葉の日本への導入

1) I.イリイチ 「ジェンダー 男と女の世界」(初版 1982年12月 NY)

玉野井芳郎訳、岩波書店、1984年

「ヴァナキュラーなジェンダーの崩壊による経済を媒介とするセックスへ」

ジェンダー：非対称的・両義的な対照的相補性、男と女の関係は不均等、男は女とは違ったとらえ方をする（現在のジェンダーの使われ方とは異なる）

産業社会：賃労働とシャドウワーク（不払い労働）とに分離することで女性差別が発生。経済活動の縮小を示唆（反近代主義との批判を受ける。）

2) ジェンダーをタイトルにした社会科学書

1980年代は「女性学」

・井上輝子「女性学とその周辺」勁草書房、1980年

・女性学研究会編、「女性学をつくる」勁草書房、1981年

1980年のシンポジウムに基づく。その後、講座女性学全4巻を刊行。

「ジェンダー」の登場は80年代末

・江原由美子ほか編「ジェンダーの社会学」新曜社、1989年

性差別、性別役割分業（社会構造、規範、意識）、ジェンダー・アイデンティティ、セクシュアリティなど。ジェンダーと日常生活、政治社会、家族、労働、感性リアリティ。

・目黒依子編「ジェンダーの社会学」放送大学教育振興会、1994年

・上野千鶴子編「ジェンダーの社会学」岩波講座現代社会学12巻、1996年

・原ひろ子ほか編「ジェンダー」新世社、1994年

ジェンダーの視点でとらえる労働・経済、政治、文化・社会、開発。

1993年6月に開催された第5回関連社会科学シンポジウム「社会科学とジェンダー」に基づく。

3) 辞典・辞書類：1990年代

新社会学辞典、有斐閣、1993年

新訂版現代政治学事典、ブレーン出版、1998年

「広辞苑」第4版、岩波書店、1991年

「新明解国語事典」第5版、三省堂、1997年

- 2 学問研究と運動（NGO）における断絶
 - 1) 従来の婦人問題研究・婦人論・女性史と女性学・ジェンダー学との断絶
女性学・ジェンダー学の欧米理論への偏り。
 - 2) 戦前からの婦人運動とリブ運動との断絶
 - 3) 研究者の姿勢：運動への共感と運動からの距離

- 3 80年の国際女性年中間年～2000年
 - ・行政主導の男女平等の達成、性別役割分業の撤廃 行政と研究、運動との蜜月
 - ・90年代後半以降は学問用語であった「ジェンダー」が行政や運動にも登場
 - ・99年男女共同参画社会基本法
 - ・2000年 基本計画

- 4 最近のジェンダー・バッシング
 - ・ジェンダー：男性と女性という2項対立構造からより中立的な概念へ。固定的な性差観にとらわれないが性差には敏感な視点。
 - ・性別役割分業構造やそれを是認する規範や意識の否定が、「伝統的な日本の家族」を壊すという危機意識につながる。

- 5 男女共同参画社会の実現のために
 - ・「ジェンダー」という用語は学問的にはほぼ定着。フェミニストの独占用語ではない。しかし、日常用語としては必ずしも定着していない。
 - ・定義は、シンプルかつ中立的であるべき。

（以上）